

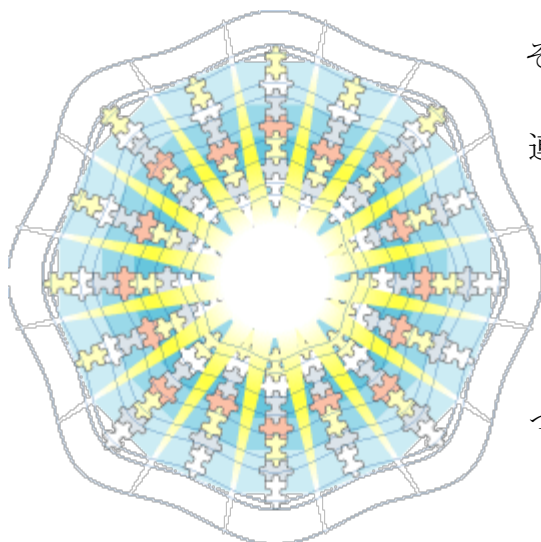
※ イラストや一部原稿の不備・手直しました追加原稿により、折角アップロードして頂いた原稿を一旦取り下げて頂きました。管理者には大変お手を煩わせ、かつ読者諸氏にはお見苦しいブランクを設けてしまいました。お詫びし、寛容な措置を賜りましたこと有難く感謝申し上げます。柳川壱信

## 五輪・真夏の夜の夢

文化外交、そして文化オリンピックの復活を夢見てしまった！

僕は、分断化が進む世界に、音楽など文化の力の活用を強く願っています。  
なぜ、「分断化」に「音楽」なのか？二つの説話を紹介します。

先ず、分断化のルーツを辿ると、ブリューゲルの絵で有名な「バベルの塔」の神話に辿りつきます。旧約聖書の中で触れている「バベルの塔」は、(一説として) 天上まで達する高塔の建設を強行しようとする人類のおごった行為が神の逆鱗に触れ、それまで一つであった言語をバラバラにされチームワークを欠いて工事は挫折、以来世界は意志の疎通を欠くようになったとされています。まさに多言語が世界分断のそもそもであるという。  
今や普遍語といわれるようになった「英語」も喋れず、コミュニケーションに苦勞した僕にも、よ〜く解かる話です。



そして、その分断を救う力となるのが「音楽」、という紀元前の興味ある説話。

ピタゴラスは、音階を発見し、さらに音程の妙を数学で解いて宇宙との繋がりに関連付け「宇宙が音楽を奏でており、それがこの世の調和をもたらしている」と説明しています。プラトンやケプラーも同様の発想という。僕は、「この世の調和」を「問題がらみの世界を平和裏に調整する」と解釈しました。

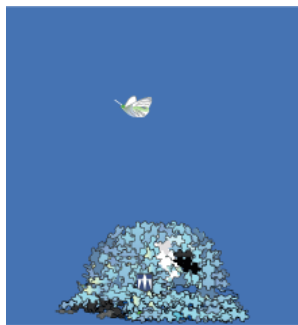
まさに言葉の壁を超越した役割を意味します。音楽好きの僕にとっては、実に愉快的な話です。

(現代科学では、一笑に付される話でしょうが、音楽をはじめ芸術には、こういった表現が許されるのではないかと僕は思っています)

この二つの説話を知って、僕は「音楽には、バラバラに分断された人間（じんかん）—関係性を強調した社会=自論）を調和ならしめる力がある」と思うようになりました。

それを象徴するように、これまでの歴史に於いて、音楽の果たした劇的なシーンが思い浮かびます。

### 分断化した世界の難局を音楽が救ってきた！



百年前の世界大戦で壮絶をきわめたヨーロッパの戦場。塹壕のすぐそばに飛来した可愛らしい蝶にそーっと手を伸ばす若い兵士。そして手が触れんとしたその瞬間、あっけなく狙撃されて命を落とす、映画「西部戦線異状なし」のラストシーン。

さて、戦端が開られた1914年、最初の冬のこと。

ドイツ側の塹壕の一箇所に灯りが点って、そこから何とクリスマス・ソング「きよし、この夜」が戦場に流れた。慰問で訪れていたドイツの歌手による、この日は12月24日クリスマス・イブ。

その時、それを合図のように銃声や爆弾の炸裂音が杜絶え、しばらくして両軍の塹壕から、一人また一人恐る恐る兵士が現れ、お互いに歩み寄って硬く握手を交わす信じられない光景が展開された！といえます。

1939年、所変わってアメリカ。

黒人歌手ビリー・ホリデイによって、「人種差別」を言葉に憚れるほどの苦しさを込めて歌にした Strange Fruit が発信され、測り知れない影響を社会に与えることとなった。その二十数年後、I have a dream! の名演説がキング牧師によって発せられ、公民権運動に繋がることになったそうです。

歴史の難しい局面で、音楽が他に代え難い力を発揮した例を挙げました。

そこで、いきなり飛躍した提案です・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

外交には、音楽などの文化を携えて臨むべきではないでしょうか

また、文化オリンピックの開催は復活すべきでしょう

今の政治の力量では、近隣諸国との外交がラチ明かず、とんでもない方向へ向って仕舞わないか？心配です。

▼ 外交は政治家だけに任せず、音楽や芸能などの文化使節を随行させ、相手国の民族音楽・芸能を披露してみせるほどの親近感を以って緊張を解き、十分な面談の機会を継続すべきと思います。

ところが交渉事すら、成果が無いと解かると会おうともしない短絡で幼稚なトップの判断が、大事な国家関

係を只ひたすら冷戦状態にしたりしています。先ず粘り強く面談することでしょう。その折に、音楽や芸能などを活用したらいいと申し上げたい。僕の案の方が幼稚でしょうか？

外務省が発信している「広報文化外交」は、自前の文化を披露して自国を理解していただく方向ですが、立場を変えて、相手国の文化を演じてみせること、つたなくてもこの方が相手の懐に入り込めそうに思います。勿論、音楽は戦いにおいて士気を鼓舞する使われ方が頻繁にありましたが、何でも活用の仕方一つでしょう。

そして世界的に、独善的排他的傾向が強まって分断化がいつそう深まり、同時にフェイクニュースに惑わされSNSのような顔の見えない口撃に曝されるようにもなりました。

▼今の殺伐とした世界に、スポーツ五輪に匹敵する文化の祭典が必要なのではないのでしょうか？

もともとオリンピックの祭典自体に、慢性化した争いを休止させる目的があったそうで、現在の開閉会に組み込まれているプログラムとは異なり、スポーツ競技と同じような重きを置いた「芸術競技」なるものもあったそうです。

文化オリンピック。

果たしてどのようなものになるのか？知恵を集めればいい。世界中の各国・各地域が自慢の民族色豊かな文化を、一会場に集めることなく資金の負担も少ない地元から発信すれば、面白そうな反応・大きな変化が期待できるのではないかと思います。

あらためて、威嚇や武力でなく口先や口撃や欺瞞でもなく、利害や損得抜きに人種や言語や国境を越えて人びとの心に訴え優しさが浸透する何か欲しい、と思うばかりです。

思えば、はるか昔から、

権益には血眼になり、武器を手にするると闘うようになり、イデオロギーや宗教を持ち出せば反目するようになる。また領土や民族、人種などは元来「問題」がらみの懸案です。

どうやらこの世は争いや戦うように造られているのかも知れません。

それを和らげるため、音楽や文化があると思います。

あたかも人類が地球上の生き物が、ビタミンやミネラルを欠かせないように…また、スポーツが猛々しい闘争本能を昇華するように…文化の存在価値といえます。

(コロナで一段と分断が深まったオリンピックの夏に、強く思いました)

と、ここで閉じるつもりでいましたが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

東京オリンピック競技をテレビ観戦した後で、それほど関心の無かったパラリンピックを観てしまって、これまで感じたことのない衝撃を受けてしまい、書かずにいられなくなりましたので、それを追加して結びたく。

水泳競技を実況するアナウンサーも解説者も泣いてしまっている！メダルに届かない結果にも、僕らには想像出来ない努力を経て辿り着いた大会であろう、晴れやかな顔で胸張る選手。伴走者と絆で結ばれて走るマラソンランナーのテープを切った後のハグする姿。「どん底だから、這い上がるだけ」と障害を負って取り組む競技人生に決意する選手の言葉の強さ。視神経を失っているというカメラマンが撮影している、そのカメラマンが発する深い話、その穏かな語り口に心打たれる。

さらに、彼らからこんな言葉が出た。

誰ひとり同じ条件は無い、皆がパイオニア。教科書が無いから、すべて自分自身で問題解決し、高みを目指す！

テレビを通じて、障害のある選手とケア・サポートする周りの多くの人々が支え合い、一つ目標に向かって頑張る現場を目撃しました…人間本来の社会の在り方を突きつけられた思いがします。

世界には 10 億人もの人が何らかの障害を持っているという。6～7人に一人、他人事でない明日はわが身の社会を共に生きていることになる。何らかの障害を抱えて生き難さを背負った人々を放置してはいけないと改めて思う。

また、こうしたことを世界に伝える報道の意義、取材の姿勢の大切さをつくづく感じます。それが無ければ、僕らは何も知らないまま、になってしまいます。

追記) 健常者の記録をも上回る、有名な走り幅跳びのレーム選手。その脳を現代科学が分析して、どうやら障害を持つ人達の突き詰めてゆく努力は、人間の身体や脳が持つ隠された能力を引き出している、と。

「平和や調和を目指す」人間にはまだまだ努力の余地がある、ということを教えられました。